

# 「教育社会学」の授業による教育効果 — 非教員免許取得希望者の学生も視野に入れて —

すず き しょう うた がわ こう いち  
鈴 木 翔・歌 川 光 一

## 〈要 旨〉

本稿の目的は、関東圏にある私立大学における「教育社会学」の授業実践を事例として、履修者の大学生の教育効果を検証することである。ある私立大学の授業後に行った質問調査により、「教育社会学」の教育効果を検証したところ、以下の知見が得られた。第1に、「教育社会学」の履修者においては、教員免許の取得希望者よりも、非取得希望者のほうが授業の教育効果が高く得られる。第2に、中学校3年生時に校内成績が下位だった学生のほうが、「教育社会学」の教育効果が高く得られる。これらの知見を踏まえて、今後の「教育社会学」の教育実践の課題を考察した。

## 〈キーワード〉

教育社会学, 教育効果, 非教員免許取得希望者

## I 研究の目的

本稿の目的は、関東圏にある私立大学における「教育社会学」の授業実践を事例として、履修者の大学生の教育効果を検証することである。なぜ、「教育社会学」の授業における大学生の教育効果を検証するのか。それは、以下の2つの問題関心によるものである。

1つめの問題関心は、教職の実践的、即戦力的な能力の育成や高度専門化が叫ばれる昨今において、経験科学としての「教育社会学」の実践はどのようにあるべきであるかというものである。たとえば、名越<sup>1)</sup>は、1999年に発表している論考において、「教員養成系大学・学部」に所属する教育社会学研究者は、『実践的指導力の向上』をキー・ワードとする(上からの)公的役割期待と(下からの)学生の役割期待、さらに、附属学校園の教員集団や一般社会からの(横からの?)役割期待に包囲されて、学問的・教育的営為の方向性を問われ続けることになる(原文ママ)(pp.16-17)と述べている。この教員の位置づけの葛藤に象徴されるように、大学教育における教育社会学教育の意義は何かという問題は、教育社会学が教育学と社会学にまたがっていることにも起因して、一つの論点となっており、教職の専門職化、高度化が目指され始めている今日においてはますます前景化した問題となっていることが想定される。このような現状の中で、どのような

「教育社会学」の実践が、学生の教育事象への興味関心を喚起しているのかを考察することが、本稿の第1の目的になる。

そして、もう1つの問題関心は、教職を志望する学生とそうではない学生が混在する中で、「教育社会学」はどのような授業を展開するべきであるのかというものである。織田<sup>2)</sup>によれば、昨今の教職課程の授業では、教職を志望する学生の教育に対しても、そうでない学生に対しても、学生に教育実践にまつわる知識・理解を深めさせるだけではなく、「曖昧だが美しい響きを持った様々な言葉(キーワード)があふれている」教育界において、「ステレオタイプの『常識的な』見方を『あたりまえ』のこととして受け入れ、そこで何となく納得して思考停止するのではなく、常識を疑い、物事を多層的・多面的に見て、深く考えるような学びの姿勢・態度を身につけることが重要」となっていることを指摘している。特に大学における教育社会学の授業においては、教育社会学が教育事象を分析対象とする経験科学であることから、経験的に確認できるデータを用いて、その構造や機能、相互の関連を明らかにし、現象を理解し考察を深めることが重要であり、実証された知見を伝達するのみにとどまらず、常に認識枠組みそのものを問い、「考える力」を養うことが肝要になると言われている(油布<sup>3)</sup>, p.322)。だとすれば、「教育社会学」の授業は、教職志望学生を履修者として想定して展開するだけでなく、大学に入学して初めて教育学、社会学に触れる非教職志望の学生もまた履修者として想定して授業の展開を考えるべきであろう。

このような問題関心から、本稿ではある大学で行われた「教育社会学」の授業実践が教職を志望する学生とそうではない学生とで、どのような教育効果の違いがあるのかを考察することとする。実際、従来の教職志望の大学生の教育に対する意識に関する先行研究を参照すると、受講者全体の学生の教職科目に関する満足度に着目した研究が大半を占めているおり、「どのような学生に」教育効果があり、「どのような学生に」教育効果がないのかという視点はあまり見られないことがわかる。<sup>(1)</sup>

そこで本稿では、非教職志望の学生も視野に入れながら、教職を志望する学生とそうではない学生を十分に区別して、「教育社会学」の教育効果について検討していきたい。

## Ⅱ 分析に使用するデータの概要と授業の構成

### 1. 使用するデータの概要

本稿の分析に使用するデータは、関東のある私立大学で開講された「教育社会学」の受講者36人を対象として実施した匿名式の授業アンケートである。このアンケートは、受講者の許可を得て、最終授業のあとに配布し、その場で教員が回収を行った。倫理上の配慮から、答えたくない項目には回答しなくてもよいことを伝えている。回収数は28であり、回収率は77.8%である。回収率が100%ではないのは、授業の欠席者や回答を拒否した履修者がいたためである。

## 2. 授業の構成

この授業では、初回の授業において、以下のような説明を行い、2回目以降の授業の構成を決定した。初回の授業では、「教育社会学」という学問の視覚について説明した。具体的には、「『教育事象』を『社会学』的に考察する学問が『教育社会学』である」ということを他の学問領域と比較しながら、説明を行った。

そして、その授業の最後にリアクションペーパーを配布し、授業の感想と「あなたが今まで生きてきた中で、印象に残っている「教育事象」を4つ以上書きなさい。」という課題を課した。その結果、75の「教育事象」が挙げられ、そのうち、複数の回答が見られた、10のトピックを2回目以降の授業で取り扱うこととした<sup>(2)</sup>。複数の回答が見られた「教育事象は、「友だち」「いじめ」「勉強・テスト・授業」「先生」「小学生」「恋愛」「不登校」「差別・けんか」「レポート」「しょうがい」である。これらはすべて「教育事象」であり、社会学的な考察が可能なものであると判断されたため、このすべてをメインピックとして授業で取り上げた。

なお、この授業は、教員免許とスクールソーシャルワーカーという2つの資格を取得するための指定科目となっている。そこで、分析に先立って、この2つの資格を取得する希望者がどれだけこの授業を履修しているかを確認しておきたい。その結果を表したのが表1である。

表1を見ると、この授業の履修者においては、資格取得のために開講された授業であるにもかかわらず、そのいずれも取得を希望しない学生が3割以上いることがわかる。また教員免許の取得を希望する学生は25.9%(14.8%+ 11.1%)、スクールソーシャルワーカーの取得を希望する学生は55.5%(14.8%+ 40.7%)となっており、教員免許の取得よりもスクールソーシャルワーカーの資格の取得を希望する学生が多いことがわかる。この特徴は、後の分析結果を解釈する上でも十分に注意する必要があるだろう。

なお表中の分布はすべて小数第2位で四捨五入しているため、合計が100.0%になっていないことに注意されたい。

表1 資格取得希望者の割合

教員免許の取得	スクールソーシャルワーカーの取得	
	希望する	希望しない
希望する	14.8%	11.1%
希望しない	40.7%	33.3%

## Ⅲ 分析

### 1. 学生の「教育社会学」の授業評価の検証

本稿の分析に先立って、「教育社会学」の効果の検証を行う。授業後の「教育社会学」の授業評価の度数分布を表したのが表2である。なお、「どちらともいえない」に関しては、「あなたが今ま

で受けたほかの授業と同じくらい」という補足があり、これまで大学で受けた標準的な授業を中心として、相対的に「教育社会学」の授業がどのように評価されているのかを知ることができる。

また本稿においては、学生による分析対象の授業への授業評価を「教育効果」の代理指標として分析していく。もちろん学生による授業評価は、主観的な評価に過ぎないため、「教育効果」の代理指標としては不十分であると考えられるかもしれない。しかし、学生の主観的な授業への関心の強さや満足度は、「教育効果」が表現される一側面として考えることも可能だろう。そこで本稿では一貫して、学生の授業評価の結果を「教育効果」の代理指標として分析を行っていくものとする。

表2を見ると、最も肯定的な回答が為されているのが、「授業が楽しかった」であることがわかる。肯定的な回答は、71.4%+25.0%で96.4%となる。そのほかの項目に関しても、今まで受けた授業よりも肯定的な評価が多く見られることから、「教育社会学」はほとんどの学生において、それほど受け入れられない授業ではなかったことがうかがえる。

表2 学生の授業評価の度数分布

	とてもあてはまる	まああてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	N
わかりやすい授業だった(%)	60.7	25.0	10.7	3.6	0.0	(28)
授業が楽しかった(%)	71.4	25.0	0.0	3.6	0.0	(28)
学問的興味をかきたてられた(%)	28.6	67.9	0.0	3.6	0.0	(28)
この授業を受けて満足した(%)	60.7	25.0	10.7	3.6	0.0	(28)

表3 授業で得られた主観的な効果

	大いにそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	N
自分にとっての新しい考え方が身についた(%)	32.1	57.1	10.7	0.0	(28)
授業で扱った分野に関する基本的な専門知識が身についた(%)	28.6	67.9	3.6	0.0	(28)
自分で調べ、考える姿勢が身についた(%)	10.7	57.1	32.1	0.0	(28)
授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味を考える姿勢が身についた(%)	28.6	64.3	7.1	0.0	(28)

続いて、授業で得られた主観的な効果を表3に示す。今回設定した項目のすべての項目において、肯定的な回答が過半数であることが見て取れる。ただし、これらの項目の中では、「自分で調べ、考える姿勢が身についた」と回答している学生は、67.8%(10.7%+57.1%)であり、3割以上の学生がその点に関しては身につけていないと考えていることが明らかとなった。この点に関しては、今回授業形式で行われた授業の限界であるといえるかもしれないため、今後の「教育社会学」の授業の展開において、調べることや考えさせたりするような機会をさらに増やしていく必要が

あると考えられる。

## 2. 資格取得希望の関係と「教育社会学」の授業評価の関連

続いて、この授業評価と資格取得希望者の関係性について、考察を行う。前述したとおり、本稿で分析対象となっている「教育社会学」の単位は、教員免許とスクールソーシャルワーカーの資格取得のために必要になっている。その2つの資格の取得希望とこの授業の授業評価の関係性について検証を試みる。

### 1) 教員免許の取得希望と「教育社会学」の授業評価の関連

表4から7は、教員免許の取得を希望しているか否かと授業評価の各項目の関連性を示したものである。サンプルサイズが小さいため検定は行っていないが、いずれの項目においても、教員免許の取得を希望しない学生において、「教育社会学」の評価が高い傾向にあることがわかる。

この点に関しては、教員が教員免許の取得希望者以外にも興味を持ってもらうような授業を志向したために生じた結果であるとも考えられるだろう。もしくは、経験科学としての教育社会学を意識しすぎたゆえに、将来教壇に立つことを希望している学生においては、実践的・当為的な知識が得られなかったことによる結果としても解釈できるかもしれない。

表4 教員免許の取得希望×わかりやすい授業だった

教員免許の 取得	わかりやすい授業だった					合計	N
	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない		
希望する(%)	42.9	42.9	0.0	14.3	0.0	100.0	7
希望しない(%)	66.7	19.0	14.3	0.0	0.0	100.0	21
合計(%)	60.7	25.0	10.7	3.6	0.0	100.0	28

表5 教員免許の取得希望×授業が楽しかった

教員免許の 取得	授業が楽しかった					合計	N
	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない		
希望する(%)	57.1	28.6	0.0	14.3	0.0	100.0	7
希望しない(%)	76.2	23.8	0.0	0.0	0.0	100.0	21
合計(%)	71.4	25.0	0.0	3.6	0.0	100.0	28

表6 教員免許の取得希望×学問的興味をかきたてられた

教員免許の 取得	学問的興味をかきたてられた					合計	N
	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いけない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない		
希望する(%)	14.3	71.4	0.0	14.3	0.0	100.0	7
希望しない(%)	33.3	66.7	0.0	0.0	0.0	100.0	21
合計(%)	28.6	67.9	0.0	3.6	0.0	100.0	28

表7 教員免許の取得希望×この授業を受けて満足した

教員免許の 取得	授業を受けて満足した					合計	N
	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いけない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない		
希望する(%)	57.1	28.6	0.0	14.3	0.0	100.0	7
希望しない(%)	61.9	23.8	14.3	0.0	0.0	100.0	21
合計(%)	60.7	25.0	10.7	3.6	0.0	100.0	28

## 2) スクールソーシャルワーカーの取得希望と「教育社会学」の授業評価の関連

表8から11は、スクールソーシャルワーカーの取得を希望しているか否かと授業評価の各項目の関連性を示したものである。これを見ると、取得希望者と非希望者の間に明確な関連は見られないことがわかる。

前項で見た教員免許の取得希望と比較しても、やはりスクールソーシャルワーカーの取得希望は、授業の満足度とそれほど関連していないことが伺える。

表8 スクールソーシャルワーカーの取得希望×わかりやすい授業だった

スクールソーシャル ワーカーの取得	わかりやすい授業だった					合計	N
	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いけない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない		
希望する(%)	60.0	20.0	13.3	6.7	0.0	100.0	15
希望しない(%)	58.3	33.3	8.3	0.0	0.0	100.0	12
合計(%)	59.3	25.9	11.1	3.7	0.0	100.0	27

表9 スクールソーシャルワーカーの取得希望×授業が楽しかった

スクールソーシャル ワーカーの取得	授業が楽しかった					合計	N
	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いけない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない		
希望する(%)	60.0	33.3	0.0	6.7	0.0	100.0	15
希望しない(%)	83.3	16.7	0.0	0.0	0.0	100.0	12
合計(%)	70.4	25.9	0.0	3.7	0.0	100.0	27

表 10 スクールソーシャルワーカーの取得希望×学問的興味をかきたてられた

スクールソーシャル ワーカーの取得	学問的興味をかきたてられた					合計	N
	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない		
希望する(%)	26.7	66.7	0.0	6.7	0.0	100.0	15
希望しない(%)	33.3	66.7	0.0	0.0	0.0	100.0	12
合計(%)	29.6	66.7	0.0	3.7	0.0	100.0	27

表 11 スクールソーシャルワーカーの取得希望×この授業を受けて満足した

スクールソーシャル ワーカーの取得	授業を受けて満足した					合計	N
	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない		
希望する(%)	60.0	20.0	13.3	6.7	0.0	100.0	15
希望しない(%)	66.7	25.0	8.3	0.0	0.0	100.0	12
合計(%)	63.0	22.2	11.1	3.7	0.0	100.0	27

### 3. 中3時の成績と「教育社会学」の授業評価の関連

1節と2節において、大学卒業と同時に取得できる2つの資格の取得希望者が「教育社会学」の授業評価の高さと関連が見られないことを示した。教員免許の取得希望者に関しては、非取得希望者に比べて、教育社会学の授業評価が低くなることもわかった。これは、将来の自分の目標や志向性と「教育社会学」の授業評価に関連が見られないことを表していると解釈できるだろう。

では、将来ではなく、過去の学生の状況と教育社会学の授業評価に関連は見られるだろうか。本節では、その一つの代理指標として、中学校3年生時の成績と教育社会学の授業評価の関連性を検証しよう<sup>(3)</sup>。

中3時成績と授業評価の関連を表したのが、表12から15である。これを見ると、授業評価のいずれの項目においても、中3時の成績が低いほど、授業の評価が高くなっていることがわかる。特に、「授業が楽しかった」「この授業を受けて満足した」という2つの項目においてはその傾向がより強く伺える。

常識的に考えれば、中3時に成績が高かった学生のほうが、大学の授業でもより積極的に受講しており、授業評価も高くなると想定されるが、本分析の結果からはむしろ逆の結果が得られている。この結果をどのように解釈することが可能だろうか。

まずひとつには、客観的に教育事象を考察するという教育社会学の特性が、過去に教育あるいは教育に親和性が高くなかった学生に受け入れられやすいというように考えられる。あるいは、そのような過去をもつ学生のほうが、教育という事象に対して、否定的な見解を持っており、その事象をより客観的に考察することが容易であったというようにも解釈できるかもしれない。

いずれにしても、本分析の対象者に関して言えば、将来の展望というよりはむしろ過去の学校経験と教育社会学の授業評価は密に結びついていると考えることができるだろう。

表 12 中3時成績×わかりやすい授業だった

中3時成績	わかりやすい授業だった					合計	N
	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない		
上(%)	50.0	16.7	16.7	16.7	0.0	100.0	6
中(%)	54.5	27.3	18.2	0.0	0.0	100.0	11
下(%)	72.7	27.3	0.0	0.0	0.0	100.0	11
合計(%)	60.7	25.0	10.7	3.6	0.0	100.0	28

表 13 中3時成績×授業が楽しかった

中3時成績	授業が楽しかった					合計	N
	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない		
上(%)	66.7	16.7	0.0	16.7	0.0	100.0	6
中(%)	54.5	45.5	0.0	0.0	0.0	100.0	11
下(%)	90.9	9.1	0.0	0.0	0.0	100.0	11
合計(%)	71.4	25.0	0.0	3.6	0.0	100.0	28

表 14 中3時成績×学問的興味をかきたてられた

中3時成績	学問的興味をかきたてられた					合計	N
	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない		
上(%)	16.7	66.7	0.0	16.7	0.0	100.0	6
中(%)	36.4	63.6	0.0	0.0	0.0	100.0	11
下(%)	27.3	72.7	0.0	0.0	0.0	100.0	11
合計(%)	71.4	25.0	0.0	3.6	0.0	100.0	28

表 15 中3時成績×この授業を受けて満足した

中3時成績	授業を受けて満足した					合計	N
	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない		
上(%)	33.3	50.0	0.0	16.7	0.0	100.0	6
中(%)	45.5	27.3	27.3	0.0	0.0	100.0	11
下(%)	90.9	9.1	0.0	0.0	0.0	100.0	11
合計(%)	71.4	25.0	0.0	3.6	0.0	100.0	28

#### 4. 自由記述回答

最後に自由記述回答の分析を行う。このアンケートは自由記述で「この授業の良い点があれば、自由に書いてください」と「この授業の悪い点があれば、自由に書いてください」という2つの項目を設定している。この項目の回答率は、「良い点」が71.4%(20人)、「悪い点」が10.7%(3人)である。



本節では、そのそれぞれについて回答を誤字等も含めて、そのまま列記し、分析を行っていくものとする。

### 1)この授業の良い点

1. 穴うめ式の授業が良かった。
2. ただ先生がしゃべるだけの授業でなく、グループワークをしたりして、授業に参加してるという感じがした。先生の事例も聞けるので、理解しやすかった。DVDも見れたのでイメージがしやすく、良かった。
3. 教師と生徒の間がいいかんじ
4. 身近な出来事、事情をあげてくれたり先生の実際の話をもぎっての講義内容だったので興味深く聞くことができた。
5. 先生の授業はすごく楽しかったです。何がといわれるとよくわからないんですが、自分が考えもしなかったことや、そういうことをすると、相手がこう思うなどの計算式的なものが、すべての人でそうではないけれど、だいたいの人がそう思うっていうのを知れて、すごく興味がわきました。先生は将来なにになりたいんですか?「先生」むいてると思いました。
6. 自分が学校生活の中で全く意識していないことを客観的に見るこの科目がとてもおもしろかった。先生が堅苦しくないので話が聞きやすい。聞こうと思える。
7. 加点レポートというシステムはとても良かった。授業も分かりやすく、先生も面白い方だったので非常に楽しかった。
8. 先生の授業、大学まだ2年の前半ですけど、入学してから1番楽しい授業でした!
9. 世の中で起きているいじめや虐待を授業の中で考えて「どうしたらいじめや虐待は失くしていけるか」を考えて将来の中で職場の中で生かしていく事が大事だ」という事を授業の中で思いました。
10. 昔ながらの固定概念だけでなく、現存の学校現場などを学ぶことができたこと。
11. 生徒にアンケートをとって自由にできるのはいいと思った
12. 授業の内容がとても身近で興味が持てました。先生も先生という感じがいい意味でなくて近い存在だったので話を聞きやすかったです。とてもためになったし、将来役に立つと思います。この授業を受けられて本当によかったです!
13. 教育社会学について楽しくみんなで話し合いながら、考えることができて、すごく勉強になりました。他の授業ではあまり身近な資料や例がないので、内容がよく入って来ました! SNSとか友達作りとか自分とは考えが違いことなどがよくわかったので面白かったです。
14. 先生が気さくで毎回笑いが起こって、場の雰囲気が和んでいました。身近な問題で授業も行われていたので、関心が持てて積極的に関わることができました。
15. 半期ありがとうございました。この授業ではいじめについて、恋愛について、学校について、さ

まざまな身近な視点で学ぶことができました。そのため、改めて友達について考えることができたり、いじめに対しての解決策、恋愛に関する執着の強さにびっくりしたりと自分の中の常識とは少しちがったり、いろいろな部分でも勉強になりました。笑 ありがとうございます。

16. 授業とても楽しかったです。前期の授業の中で1番です!
17. 先生の授業好きだったよ。これからもがんばってください。
18. 先生の授業とっても楽しかったです! 科目自体も面白いものだったけど、先生の体験談が1番面白かったです。また先生の授業受けたいです。ありがとうございます。
19. 先生へ。先生の授業すごたのしかったです。もっと先生の話聞きたかったし、また授業してもらいたいです。半年でしたが、ありがとうございます。
20. 15回授業ありがとうございます! 教育社会学が前期の授業の中で1番楽しかったです。(お世辞ではないですよ) 内容が自分とすごく身近だし先生も親しみやすかったです。もっと勉強してみたいと久しぶりに思いました。本も読んでてすごくおもしろいです。お母さんと一緒に今読んでます。またどこかで先生の授業を受けられたら嬉しいです!

自由記述の「良い点」の回答を見ると、理由が記入されておらず、単純に「よかった」と記入されているものや、授業の展開の仕方に関するものが多く挙げられているが、教育社会学の特徴が面白かったものがいくつか見られる。

たとえば、5の「自分が考えもしなかったことや、そういうことをすると、相手がこう思うなどの計算式的なものが、すべての人でそうではないけれど、だいたいの人がそう思うっていうのを知れて、すごく興味がわきました」や6の「自分が学校生活の中で全く意識していないことを客観的に見るこの科目がとてもおもしろかった」という記述は、経験科学としての教育社会学に興味を持ったという記述として解釈が可能だろう。

また、13の「他の授業ではあまり身近な資料や例がないので、内容がよく入って来ました!」という記述は、実証的なデータをもとにして教育事象を捉える手法に親近感を覚えた記述として解釈することが可能である。

いずれにしても、教育社会学を教えるということの難しさは、方法の工夫において、一定の効果を上げることができることが自由記述の分析により明らかにされた。

## 2)この授業の悪い点

1. 授業中うるさいときがあったので注意してほしかった
2. うるさい人への注意をもうすこししていただければと思いました。
3. もっと教師にとって大事なことや、生徒が安心して学校生活を送れるようにしたらどうしたらよいかなどを教えてほしかった。

続いて「悪い点」の分析を行う。「悪い点」に関しては3つのうち2つが履修者の私語を注意が甘かったという教員の行動に対する不満であり、この点に関しては、次回から早急に対処すべきだと考えられる。

特筆すべき点は、3の「もっと教師にとって大事なことや、生徒が安心して学校生活を送れるようにしたらどうしたらよいかなどを教えてほしかった」だろう。これは、客観的に教育事象を捉えることに対する不満が記述されているものだと解釈できる。「良い点」でも挙げられていた経験科学としての教育社会学の特性が特定の生徒に受け入れられず、消化不良を起こしてしまうかもしれないという点は、真摯に受けとめ、改善策を模索する必要がある。

#### IV 総括

これらの分析結果を受けて、当初の問題設定である「教育社会学」の授業における大学生の教育効果に関して、どのように答えることが可能だろうか。まず一つ目には、大学の授業が教育事象や教育実践に対して、あるべき一つの答えを教えてくれることを期待している学生にとっては、「教育社会学」の授業は一定の効果をもつことができるかもしれないということが出来る。それは、自由記述の回答から読み取れるだろう。

また本稿の分析においては、教員免許を取得しない学生のほうが、希望する学生よりも「教育社会学」の評価が低い傾向が見られたが、それは、将来教職に就きたいと思っている学生にとっては、教育に対し、多角的な視点を得ることが必ずしもよい教育実践を行うことと結びつかないかもしれないと考えられていると解釈できる可能性がある。

第2に昨今「大学生がまじめになった」ことが多くの研究者や教育評論家から指摘されているが、それは必ずしも自分で調べたり考えたりすることができるようになったということを示さないかもしれないということが考察できる。分析対象の授業の履修者においては、ほとんどの学生の欠席が5回以内であり、すべての授業に出席した履修者も複数名見られたが、今回の分析を見ると、自分で調べたり考えたりすることができるようになっていないわけではないことが推測できる。

分析対象の授業では、グループワークやロールプレイングなどを積極的に導入するなど工夫をしたつもりでいたが、それでもなお、「自ら調べ、考える姿勢が身についた」と回答している学生が少なかったことから、そのような考察が可能であると考えられる。

ただし、本稿の分析は一つの大学の一つの授業実践をもとに分析されたものであり、他の大学や他のクラスの授業実践に関しても同様の結論が導き出せるとは言いがたい。さらなる検証をすすめることによって、より精緻な「教育社会学」の教育効果を明らかにしていく必要があるだろう。

### 〈注〉

- 1) このような研究の問題点をまとめたものとしては、太田<sup>4)</sup>が詳しい。
- 2) なお、この回授業では回答が見られた「教育事象」だけではなく、教員が学問上必要だと判断した「教育事象」に関しても、授業では取り扱っていることに注意されたい。つまり、学生から挙げられた「教育事象」をトピックとして授業を展開しているが、それに加えて他の複数のトピックに関しても、適宜授業で取り扱うようにしているということである。
- 3) 中学校3年生時の成績は、当時の学年における校内の成績を「上」「中の上」「中」「中の下」「下」の5段階で主観的に回答してもらい、ほぼ正規分布となる回答が得られている。本稿の分析においては、解釈を容易にするため、「上」と「中の上」を「上」、「中」を「中」、「中の下」と「下」を「下」とする3段階の変数に集約し、分析を行っている。

### 〈引用文献〉

- 1) 名越清家：教育実践と教育社会学－教育社会学的研究のアクチュアリティ－，教育社会学研究，64，pp.5-20，1999.
- 2) 織田泰幸：教職志望学生の自明性を問い直すための授業実践(1)－「個性」に関する言説の検討，大学教育研究，22，pp.39-44，2014.
- 3) 油布佐和子：教員養成系大学で教師の社会学をどう教えるか－教育実践家にとっての教育社会学，日本教育社会学会大会発表要旨集録，pp.322-323，2000.
- 4) 太田拓紀：教職における予期的社会化過程としての学校経験，教育社会学研究，90，pp.169-190，2012.